

# 余白の風

求道俳句誌

二〇一六年七月号  
第二二二号  
奇数月二〇日発行

発行と一  
余白田栄  
主宰  
余平

俳句や短歌をつくりながら、「南無アツバ」の心を養います。

会員作品のエッセイ \*選評)

名古屋・片岡惇子

いつくしみ紅見せ梅の落ちにけり  
過去のひとさらりと捨てて衣更  
否否とときほぐす自我蓮の花  
真っ直ぐに生きるしんどさ立葵  
うなだれし紫陽花の屋南無アツバ  
主のみ心祈る静寂沙羅の花

\*②理想的な心境。③そこまで行くまでの葛藤。  
④ときには右往左往してもいいのではないかと。  
⑤自我が打ち砕かれたとき思わず口をつく  
「南無アツバ」⑥私の願いではなく、アツバの  
お望みのままにーゲッセマネのイエスさま。

豊田・佐藤淡丘

荒梅雨に池面膨らみ零れぬす  
水門に籠る雄叫び梅雨最中  
迎え梅雨湖の広さに佇めり  
水敲く水の命や夏つばめ  
駅に問ふふる里訛り走り梅雨

荒梅雨を辛いとも思わず、ゴム長靴を履き  
水たまりを音をたてて歩きます。早朝散歩も  
ここまでくると、変わり者と妻は噛み合いますが、  
天の神さまは、意外やいがい、大きく手を広げ  
て待っていてくれます。アツバ・アツバ・南無  
アツバの心境です。

\*「意外やいがい」アツバさまは、思わぬところ  
で私たちを迎えてくださいます。「神が不在  
に思えたのは、私たちが予期したようなやり方  
で神が存在していなかったからです。一コリン  
ト1・27〜28」(A・マクグラス)

大阪・島一木

十字の花の十葉も抜くミサの後  
ミサの鐘鳴り終はるまで朝曇り  
蝉は樹に人はミサにて主を讚美

\*島氏の作品はいつも、どこか田舎の小さな教  
会の風景を思い起こさせます。そこで静かに祈  
りをささげ、ミサを大切にしている作者の姿が  
あります。

昭島・新堀邦司

友からの見舞状に  
外に出でよ魚氷に上る頃といふ

孫娘、生後四か月に  
雖に似し口すこし開けお食ひ初め

三度目の手術を前にして  
あとひとつ峠越えれば花の春

病癒ゆ  
新しきスニーカー履き青き踏む  
鎌倉に花咲かせて基吉忌

\*御快癒おめでとうございます。作品を連作的  
に読ませていただくとき、ご苦労が偲ばれます。  
「神と共にある人間の生とは実にそのような  
惨憺たる状況の中にある・・・しかしそれこそが  
人間の本来の真の生命なのであって、・・・苦難、  
悲惨、苛酷さと結合した生こそが、逆説的に神  
の慈愛と恵みそのものなのだ」(青野太潮)

高知・赤松久子  
無花果の皮をむきつつ君偲ぶ  
祝ふより神妙になるクリスマス  
ゲッセマネ君祈られし南無アツバ  
「我が恵み汝に足れり」と主のみ声

\*②クリスマスの「神妙」——キリスト者は喜  
びとともに、③受難へと進むイエスの生を思わ  
ずにいられません。しかし苦難のなかでパウロ  
も聞いたあの声「④。力は弱さの中でこそ十分  
に發揮されるのだ」(二コリ12・9)は、す  
べての人の真理でもあります。

「知恵の書」を讀みて 八王子・F井上

「知恵の書」に神の計らい細やかに愛の深  
さと重さを恐れ

苦しみの価値を救いに役立たせ再びの時  
輝きの時

回心を促す神の忍耐は真の慈悲をもって  
包まる

愛の心促す神の寛容は人の思いをはるか  
に越えて

\*久しぶりのご送稿うれしく思います。①④神  
の慈愛は人の想像をこえる。②災害や災難が続  
きます。「苦しみ」の意味が問われます。

練馬・魚住るみ子

ひと碗の抹茶に癒され南無アツバ蠟筆を  
運ぶ老深き日も(ろうけつ染)

南無アツバ木の芽山椒のみどりの葉朝  
の陽ざし受けて光れり

風の来て掃き寄する落葉吹きさらす徒勞  
に似たり憲法記念日

『風の道』

エルミタージュ展に買ひし絵葉書忘れ悔  
いつつ此度の旅を終れる

\*③編者は今、参院選と都知事選を目前にした  
時に書いています。老後の不安、介護や保育の  
問題、立憲主義の危機等々、すべて待ったなし。  
こうした政治状況のなかで私たちの信仰が問  
われています。

東京・岡村康子

枝の先ゆらゆらゆらし雀の子  
白鷺や水を含めて空青し

\*「空の鳥を見よ、蔭かず刈らず、倉に納めず。」  
あるいは「雀の一羽さえ、神無しに地に落ちな  
い。」(マタイ) イエスさまが自然をどのよう  
に見ていたのか知りたいと井上神父は、よくおっ  
しゃっていました。

帳尻は神が合わせる朝の雪

蓮田・平田栄一

死んで金持ち陰府に下り、貧しいラザロは天に  
上げられた、という。アツバは良いことも悪いこと  
も、この世とあの世を含めてトータルで考えていて  
くださる。自分だけが損をしていると卑屈にならず、  
自分は得をしていると自惚れず、安心して毎日を過  
ごせばいい。

新刊・定価800円十税。

聖母文庫 095・82

4・2080。サイン本

希望の方は平田までご連絡  
ください。送料込み千円



平田講座要約(第四十一回その2) 2013-10-19

(テキスト『心の琴線に触れるイエス』聖母文庫)

前回まで、北森神学と井上神学を比較する前  
に、「パウロの二つの顔」——フアリサイ派  
に、伝統・保守対ディアスポラヘレニスト——を  
比較し、二つの神学キーワードとしての「悲愛」  
と「神の痛み」を比べました。そして、青野神  
学からイエスの「死」と「十字架」を分けて考  
えることで見えてくるものにも触れました。  
今回は本文に戻ります。

p・51

北森神学において、父なる神の愛の対象とし  
ているのは、例えばイエスであり、また罪を犯  
す前の人間である。ところが人は罪を犯したが  
故に神の怒りの対象になって神の愛の外に、い  
わばはじき出されてしまった。こうして本来切  
り捨てられる運命にある存在、そういう人間を  
しかし更に包み込む時に、神の痛みというの  
があり、それが神の痛みに基づけられた愛であ  
る、というのが北森神学の一つのポイントなの  
だ、と。(北森氏にとって)「どうしようもない  
自分の罪というものを考えると、神の愛によつ  
て包まれるためには、キリストを通しての神の  
苦しみ、痛みというものが不可欠になってく  
る。」そしてそこに非常な力点を置いたがゆえ  
に、神の愛というのがむしろ影が薄くなつてし  
まった、といえます。総じて、北森神学はパウ  
ロ的で激しく、重い。その重すぎるところが日  
本人にとつて問題になる、というわけです。

本来受け入れ難い者を受け入れるところに、  
血が流れる、という言い方は、井上神父も『愛  
を見つける』あたりから、十字架の意味として

感じた、というようなことを書いています。し  
かし、ここにあるように、その前提として、「罪  
を犯した人間を神の怒りの対象」として見る、  
というニュアンスは、井上神学にはありません。  
この本来「怒りの対象」になるべき罪人を、包  
み込むとき神の痛みがある、というのが北森神  
学なのですが、やはり、そういう怒りを抑え  
て……という所は、勸善懲惡の父性原理に立つ  
て、厳父の神が我慢している、というイメージが強  
いのです。

これまで贖罪論一辺倒に傾いてきた西欧キ  
リスト教と、それを直輸入した日本のキリスト  
教への批判として、青野太潮氏の『十字架の  
神学』をめぐる(二〇一一年)の書評の中  
で、高柳富夫氏は次のように言っています。

「十字架とは、供儀的贖罪でもなければ、神  
が罪のない独り子の血を流してこの世全体と  
和解したなどということでもないのです。その  
ような考えは「なんと残酷で、なんと邪まなも  
の」(P・アベラール、一九四、二七〇頁)で  
あり、「歴史的にみたキリスト教が迫害者的性  
格のものであり続けてきた原因」(R・ジラー  
ル、二三九頁)であり、「それは、言うならば、  
非常に陰惨な神学です」(G・タイセン、二六  
九頁)。

南無アツバの集い&平田講座II於：四谷ニコラ  
バレ、日時7/23(土) 13時半、8/27  
(土) 同

「余白の風」入会案内

\*となたでも参加できます。購読のみ可。\*年六回寄数月  
発行\*年会費千円(送料共)\*採否主宰一任\*締切日偶数月  
二十日\*投稿先 フロク「南無アツバを生きる」サイドバー  
余白メールよりお願いします。\*〒振替口座〇〇一七〇一三  
一六〇九〇九 平田栄一